

「春告魚の来るころ」

大谷英理子

\* 登場人物

西野俊夫（18・48）  
西野富蔵（82・52） 俊夫の父  
西野綾子（45） 俊夫の妻  
西野啓介（21） 俊夫の息子  
島田千代（77） 富蔵の近所の人  
俊夫の部下  
ガソリンスタンドの店員  
ラジオのアナウンサー  
居酒屋の店主

\* あらすじ

東京の商社に勤める西野俊夫（48）は、担当した木材の不正輸出が摘発され子会社へと出向する。事実上のリストラだった。長年会社人間だった彼に、息子の啓介も、妻の綾子も冷たい。傷心の俊夫は、一人車を走らせる。向かった先は春まだ浅い北海道・小平の海。そこは30年前、飛び出したまま一度も帰らなかった故郷だった。今は年老いた父が一人で暮らしている。家に帰りづらいつと潮は、途中立ち寄った留萌の居酒屋で昔のようにニシンが獲れるようになったことを知る。かつて父、富蔵が追い求めていたニシンは、獲れなくなつて久しく幻の魚と呼ばれていた。父はまだ漁を続けているのだろうか……次の日、生家を訪ねた俊夫はニシン漁を語り継いでいるという、思いがけない父の姿を知る。突然現れた息子に富蔵はつれない。が、生氣のないその姿になにかを感じて俊夫を浜に誘う。にしん曇りの午後、二人の前には乳白色に広がる「群来」た海が広がった。

SE 国道を走る車の車内。

カーラジオから流れる天気予報。

アナウンサー「『立春』を過ぎ、寒さは道内各地でピークを迎えています。上川地方の占冠村では今朝、氷点下30度以下の厳しい冷え込みとなり……」

SE ブレーキの音。ドアの開閉音。

波の音に重なり俊夫の雪上を歩く音。

俊夫「『けあらし』だ……」

俊夫N「目の前に幻想的な冬の海が広がっていた。海上一面に立ち上る水蒸気。その中を朝日を浴びた一艘の船が漁に出て行く」

SE 波の音・漁船のエンジンの音。

俊夫N「『けあらし』とは、冷え込んだ冬の朝方、海上から昇る水蒸気が冷えて、霧となって漂うことを言う」

SE 波の音、離れていく漁船の音。

俊夫N「三十年前と少しも変わらない、故郷の海がそこにあった」

SE 港の騒音・貨物船の汽笛。

俊夫N「俺の名前は西野俊夫、四八歳。筋金入りの商社マンとして、実直かつ勤勉に会社に忠誠心を捧げ続けて二六年……」

アナウンサーの声「次のニュースです。マレーシアのポートクラン港で違法伐採された木材から生産された合板が、日本へ向かう運搬船に積載されていることが明らかになりました。関係者によると、合板はマレーシアの伐採企業によって原生林から違法に伐採されたもので、原木を加工し合板として日本に輸出していた模様と思われまます。日本の輸出先企業を含めた実態調査を詳しく行っていく見通しです」

SE オフィスのざわめき。

俊夫「まずいことになった」

部下「時間の問題ですね、うちの名前が表に出るのは」

俊夫「くそつ、早く対策を打たないと」

部下「明日、現地に飛びます」

俊夫「いや、その前に根回しだ」

部下「やばいっすよね、今叩かれると……」

俊夫「とにかく、勝手には動くな。企業としての体面を保つのが先だ」

俊夫N「事件はマスコミに大きく取り上げられ、社会的な責任をとり社長が辞任。そして木材輸入部門の責任者として俺は……」

……

SE まな板で野菜を切る音。

啓介「おはよう、かあさん」

綾子「おはよう、啓介、朝食、今作るから」

啓介「あわてなくていいよ、朝刊は？」

綾子「そこに置いたわよ、さっき」

SE フライパンに卵を流し込む音。テーブルに食器を並べる音など。

啓介「親父は？」

綾子「まだ寝てるわ」

啓介「出社拒否ってヤツですか」

綾子「ここんどこ体調が悪いらしいの」

啓介「休みもいとわず24時間戦ってきた凄腕の商社マンも、リストラには勝てずか」

綾子「こたえるの、子会社に向ってのは」

啓介「今はどんな仕事してるの？」

綾子「う、うん……それがねえ、港の倉庫の管理だつて」

啓介「完全にお払い箱ってわけだ」

綾子「しっ、聞こえるって」

……

SE 襖の開く音。

俊夫「聞こえてるよ、もう」

綾子「あなた……」

啓介「おはよう、どう、体調は？」

俊夫「まあまあだ」

啓介「病院は行ってんの？ちゃんと薬は飲んで方がいよいよ、鬱入っちゃってるときは」

綾子「啓介！」

俊夫「（咳払いして）新聞」

綾子「あ、はい……」

SE 新聞を手にして渡そうとする。

綾子「あ……」

俊夫「どうした」

綾子「いえ……」

啓介「朝刊の社会面で叩かれていますよ、父さんの会社」

俊夫「なに？綾子、かせ」

SE 荒々しく新聞を開く音。

俊夫「ばかやろー、あることないこと書きやがって」

啓介「まあ、時代が悪かったね」

俊夫「なんだって？」

啓介「世の中エコだつてこと。企業は自分たちの収益を上げることだけ考えていたら、成り立たないんじゃないですか？」

俊夫「聞いたようなこと言うな！」

啓介「父さん、一本の木が育つのに何年かかるのか知ってるよね？森林破壊が叫ばれてずいぶんと立つけどさ」

俊夫「お前に、俺の仕事のなにがわかる」

啓介「マングローブ林に群生する植物種の7分の1が絶滅の危機にあるんだってさ」

俊夫「うるさい！社会に出てもない若造が生意気なことを言うな！」

啓介「じゃあ聞くけど、父さんのしてきた仕事は、誇りの持てることなのか？」

俊夫「なんだって？もう一度言ってみろ」

綾子「やめてください！あなた、啓介も」

SE 薬缶の沸くピーという音。

啓介「学校、行ってくる」

SE 啓介の出て行く足音。  
ガスを切る音。薬缶の音が止む。

俊夫「分かったような口をききやがって」

綾子「あなたは、なにも知らないのよ」

俊夫「なにをだ？」

綾子「大学でいろんなことを学んでるわ、あの子だつて」

俊夫「だからどうした？」

綾子「人間環境学部よ、あの子の学部」

俊夫「反面教師とでも言うのか、俺が」

綾子「もう子供じゃないって言ってるの。それ……」

俊夫「なんだ？」

綾子「あなたはいつも仕事が一番で、私たちが方なんて少しも見ていなかった」

俊夫「お前まで、なにが言いたい？」

綾子「私ね、離婚、考えてるの。ほんとうはあなたがこんな時、言いだしたくなかったんだけど……ずっと前から考えていた」

俊夫「流行りの熟年離婚ってやつか？少しばかり外で稼げるようになったから……」

綾子「あなたに迷惑はかけません、啓介にも同席してもらってきちんと話しましょう。じやあ私、時間だから行きます」

俊夫「綾子！」

綾子「あ、啓介も私も今晚遅いから」

SE 綾子の去って行く足音。  
ドアの閉まる音。

俊夫「なにが離婚だ！こっちのほうから願ひ下げだ！」

SE 新聞を叩きつける音。

俊夫「ばかにしやがって、どいつもこいつも！」

音楽

S E 時計の刻む音。

俊夫N「食卓の朝食はすっかり冷めていた」

啓介の声「マングローブ林に群生する植物種の7分の1が絶滅の危機にあるんだってさ」

俊夫「しかたないだろ、それが俺の仕事だ」

啓介の声「じゃあ聞くけど、父さんのしてきた仕事は、誇りの持てることなのか？」

俊夫「俺なりに、一所懸命やってきたんだ」

綾子の声「私ね、離婚を考えてるの……」

俊夫「ふっ……ふふふ……（しだいに涙声）」

俊夫N「気がつくと、医師から処方された菓の袋を、ぼうつと見つめていた……」

S E 時計の刻む音。

俊夫M「いま消えても悲しむ奴などいない」

S E 時計の刻む音、大きくなって。

俊夫N「……ふと、おぼろげな記憶が蘇ってきた……こんなふうに時計の刻む音を聞いていたことが確かにあった……」

S E 遠くに聞こえる波の音。

俊夫「あれはいつだったろう……」

S E 波の音。

俊夫N「波の音？ そうだ……深夜まで受験勉強していた高校の頃、遠くに聞こえる潮騒と、チクタクと規則正しく刻む柱時計の音が、永遠に思えてならなかった……」

S E カモメの鳴き声。

(回想)

富蔵「ばか野郎、漁師の息子がなして勉強なんてする？」

俊夫「俺は漁師になんねえ。大学に行く」

富蔵「そつたらこと、誰が許した」

俊夫「決めたんだ。この町を出るって」

富蔵「金なんかねえぞ」

俊夫「働きながら夜学に通う」

富蔵「夢みてえなこと言ってるんでねえ」

俊夫「夢みてえなこと言ってるのは親父の方でないか」

富蔵「なんだったって？」

俊夫「『ニシンはぜってえ戻ってくる』だあ、夢みたいなこと言って、船新しくしたのは親父だけだぞ」

富蔵「したけどニシンは戻ってくるべ」

俊夫「親父の時代は山ほど船につんできたかもしんねえが、今は「幻の魚」なんだぞ、ニシンは」

富蔵「そつたらことねえ、そつたらこと……」

俊夫「俺の生まれる前にはもう、『群来』は来なくなっちゃって言うでねえか」

富蔵「したけど、ニシンは漁師にとつて特別な魚だ」

俊夫「親父の夢に付きあわされて、借金しよつて貧乏なまま死んでいった母ちゃんは どうなる」

富蔵「……」

俊夫N「高校を卒業すると、逃げるように北海道を出た。それから一度も故郷には帰ってない。寂れた港町で親父は今でも幻の魚を追っているのだろうか……」

S E 小さく響く波の音。

俊夫N「無性にあの波の音が聞きたかった」

S E 車のエンジンが掛かる音。

俊夫「……小平に帰るべ」

S E 車の走行音。

ラジオ「JARTICからの道路交通情報です。東北自動車道、西那須野塩原ICより積雪のためタイヤチェーンなどの滑り

止めが必要です」

俊夫「雪か……次のサービスエリアで……」

SE 車が止まりエンジンを切る音。

店員「いらっしやいませ」

俊夫「ガソリン満タン、それとタイヤ交換し

てくれる？」

店員「分かりましたーガソリン満タン」

俊夫「今日中に青森まで行けるかな？」

店員「急げば夕方には着くんじゃないすか」

SE エンジンがかかり走り出す音。

俊夫N「トンネルをいくつか抜けると、辺り

は一面の雪景色になった」

SE 雪道の高速道路の走行音。

俊夫N「青森で一泊し、翌朝、津軽海峡フェ

リーで函館に渡った。ずいぶん前に青函

連絡船がなくなり、北海道は鉄路で本州

と結ばれた。『内地』はあの頃より近く

なったのだろうか」

SE 車の走行音。吹雪の音。

ラジオ「北海道は現在も冬型の気圧配置が続いており、日本海側では吹雪や大雪になっています。引き続き車の運転には……」

俊夫N「函館から国道230号線で札幌に入

り、そのまま海沿いの道を留萌に向った。

にび色の空から絶え間なく降る雪は途中

から吹雪に変わった。立春の声を聞いて

も、北国の春はまだ遠い」

SE 吹雪の音。砕ける波の音。

俊夫「大時化だあ……」

俊夫N「幸い通行止めにはならず、夕方には

どうにか留萌に着いた。だが俺の故郷は

留萌の先の小平というちいさな町」

SE 居酒屋店内の賑わい。

店主「へい、ホッケとタコ酢、お待ちい」

俊夫「(呟き)懐かしいなあ、ホッケ」

店主「お客さん、内地の人？」

俊夫「え？」

店主「いや、地元の奴らはホッケなんか珍し

くもないからさ」

俊夫N「その晩、俺は留萌の居酒屋のカウン

ターで一人酒を飲んでいた」

俊夫「(呟き)どんな顔して帰ればいい、ど

んな顔して、今さら……」

SE ビールを飲み干しコップを置く。

俊夫「おやっさん、爛つけて、ぬるめで」

SE 外の吹雪の音。

店主「荒れてきたねえ。へい、爛、お待ち」

俊夫N「とつくりを受け取る時、カウンター

の上に吊るされた魚の干物が目に入った」

俊夫「それ、なに？」

店主「これかい、鯨さあ。刺身もできるよ」

俊夫「刺身……獲れるのかい？鯨が」

店主「ああ、戻ってきたのさ、十年くらい前

からかなあ。新鮮な地元産の鯨をお客に出

せるとは思ってもなかったよ」

俊夫「戻ってきた……鯨が……」

SE 有線の『石狩挽歌』が低く流れ

て。

俊夫「親父……」

SE 『石狩挽歌』(FO)

SE 車の走行音。

俊夫N「吹雪はやみ、翌朝早く、留萌の海に『けあらし』見た俺は、背中を押されるよう

にして小平に向った」

SE エンジン音止んでドアの開閉音。  
遠くに波の音。

俊夫N「トタンの屋根、ブロック作りの壁。  
俺の生まれた家がそこに建っていた」

SE サクサクと雪を踏む俊夫の足音。  
玄関の戸をガタガタと鳴らす音。

俊夫「鍵がかかっている……父さん、父さん、  
いないのか？父さん」

俊夫N「裏に回って窓から家の中を覗いてみ  
た。カーテン越しに昔と少しも変わらな  
い茶の間が見えた。壁の柱時計もあの頃  
のままだ。まるで、そこだけ時間が止ま  
っているかのように……」

俊夫「親父……ずっと一人でここに……」

SE 近づいてくる足音。

千代「俊ちゃん？俊ちゃんでないかい？」

俊夫「…… 島田の、おばちゃん？」

千代「やっぱり俊ちゃんかい。懐かしいねえ。  
帰って来たのかい？お父さん喜ぶつし  
よ」

俊夫「ご無沙汰してます。あの、親父留守み

たいだけだ」

千代「ああ、鯨御殿に行ってるんだわ」

俊夫「鯨御殿で？」

千代「昔の花田家の番屋さ。あそこ、今、観  
光客に公開してんのさ」

俊夫「そんなところに、なして親父が？」

千代「富蔵さん、お客さんに昔の漁のこと解  
説してんのさ」

俊夫「カイセツ？あの親父が？」

千代「そうさ、立派な生き字引きだもんねえ。  
小遣い稼ぎにもなるっしょや」

俊夫「親父のヤツ……」

SE 歩き出す俊夫の足音。

千代「泊って行くんでしよう？うちにも顔出  
して。じいさんも喜ぶからさ」

SE エンジン音・続いて走行音。

俊夫「どこまでもニシンで稼ぐ気だな、あの  
クソ親父」

音楽

SE エンジン音止んでドアの開閉音。  
歩き出す俊夫の足音。

俊夫「すげえ、こんなに立派なものだったか  
な？ 観光バスまで止まるんだ」

俊夫N「旧花田家番屋に着いた。入り口で観  
覧料金を払い中に入る」

SE 人々のざわめき。

富蔵「皆さんこちらへどうぞ」

俊夫「親父の声だ！」

富蔵「ここ旧花田家番屋は日本最北端の国指  
定重要文化財で、道内に現存する番屋で  
は最大規模を有し……」

俊夫「歳くつたけど、変わんねえな、親父。  
今年で確か……82か！」

富蔵「当時は雇い人が200人を越えたと言  
われていて、その頃はこのあたりも……  
……」

俊夫N「俺は観光客にまぎれて親父の話を聞  
いた」

富蔵「次はあつちの間さ、来てください」

SE ぞろぞろと移動する観光客。

富蔵「ここはやん衆たちの待機場で……」

SE (昔の回想として)

カモメの鳴き声。波風の音。

「ゴメが来たぞ！」の声。

(掛け声)「オーシコーエンヤ

「アエー」

俊夫N「親父が盛んだった頃の漁の話を始めた」

SE (昔の回想として)

波が船に当たる音。

「網を起こせーの声」

シュッシュッと網が引き上げる音。

(掛け声) 「ヤーセイヤサホ

イ」

飛び跳ねるニシンの音。

(掛け声) 「ソーランソーラ

ン」

富蔵「昔はこの前の浜にもニシンがいっぱい来てさ、ちょうど今頃の時期には海は群来て真っ白になったもんだ」

観光客「群来ってなに？」

富蔵「群来ってかい？ よく聞いた。群来ってのはニシンが産卵のため大群で浜に押し寄せる様子を言うのさ。メスが海藻に卵を生みつけて、オスが精子をかけるんだ。このとき海が真っ白になってさ、昔はそりゃあすごい数だったから……」

俊夫N「興が乗った親父の話は続いた。その時、親父と目があつた」

SE ぞろぞろと歩く観光客の足音。

富蔵「今日みたいな空を『にしん曇り』て言うのさ。こんな日は『群来』が見られるかもしれない。隣の道の駅で、ニシンそばでも食ってから浜に出てみるといいべさ。ニシンは美容にもいいんだってよ、鉄もカルシウムもいっぱいあるしさ。奥さんら、もつとべっぴんになるよ」

SE 観光客の笑い声。

ぞろぞろと出て行く足音。

富蔵「タコやホタテもあるからねー」

俊夫N「親父が観光客を送り出して戻ってきた。部屋の中に一人残された俺に向ってゆっくりと歩いてくる」

SE 富蔵のやってくる足音。

俊夫M「なんて言う？俺…… 親父になんて話しかければいい」

SE 富蔵の足音通り過ぎて

俊夫「親父、なして無視する？」

SE 足音止まり

俊夫「三十年振りだけど、息子の顔、忘れたわけではないべ」

富蔵「なにしに来た？」

俊夫「…… 仕事で札幌まで来たから……」

俊夫N「親父が振り向いてじろりと俺を見た」

富蔵「おめえ、東京で商社マンさ、やってるって言うでねえか」

俊夫「ああ、光岡物産の部長だ、今」

富蔵「出世したもんだな。で、なんで今さら戻ってきた、こんな田舎によ」

俊夫「それは…… 市場調査っていうか」

富蔵「ニシンはおめえらの思うようにはさせねえぞ、バカたれ！おめえ、ニシンがなんもしねえで戻ってきたと思うか？」

俊夫「え？」

富蔵「北海道の人間の努力があるんだ、十五年も前からだよ。日本海にしん資源増大プロ……プロジェクト……」

俊夫「プロジェクト？」

富蔵「ああ、それだあ、随分苦労したさ」

俊夫「な、なんなんだ、それ？」

富蔵「稚魚から育てて放流してよ、漁師も大きくなるまでは獲らねえ。みんなしてニシンを呼び戻したんだ。おめえらが手出したらせつかくの苦労が台無しだ」

俊夫「そんなことは、しないさ……」

SE 波の音・カモメの声。

俊夫N「長いこと会っていなくても、精彩をかいた息子の様子がおかしいのを気づいたのだろうか」

SE 波の音、浜の賑わい。

俊夫N「それ以上は何も言わず、親父は俺を浜に誘った。浜にはたくさんの人が『群来』を見ようと集まっていた」

SE 沢山のカモメの声。  
人々のどよめき。

俊夫N「一瞬、海の色がエメラルドグリーンに変わった」

SE 人々の歓声。

観光客A「うわあー、海面が真っ白だ」  
観光客B「すごい！ほんとに牛乳を流したみたい」

俊夫「これが……群来か……」

俊夫N「目の前には、海岸線から沖合いに向かって150mの間だろうか、帯状に白濁した海面が続いていた。その幅は、約2Km……」

俊夫「親父が、あきらめずに追い続けたもの……」

SE 海岸線を走る列車の音。  
遠くに小さく響く波の音。

俊夫N「その晩、俺は家に泊まった」

SE ビールの栓を抜く音。

富蔵「はじめてだな、お前と酒飲むの」

俊夫「長いこと連絡もせず悪かったな」

SE 富蔵が俊夫にビールを注ぐ音。

俊夫「親父も」

SE 俊夫が富蔵にビールを注ぐ音。

富蔵「身体さ、大事にしろ」

俊夫「ああ、親父もな」

富蔵「人生は色々ある……したけど、あきらめたらおしめえだ」

俊夫「ああ」

富蔵「やり直せねえことはねえ……やり直せねえ、ことは……」

SE 遠くに小さく響く波の音。

SE 車のエンジンをかける音。

携帯電話のプッシュ音、続いてコール音。

俊夫「綾子か？俺だ、うん、ちよつと実家に……ああ、大丈夫だ。これから帰る」

SE 車の走行音。

俊夫「くさってなんかいらねえ。なんかやらんと……俺も、なんか……」

俊夫N「アクセルを踏む足に力を込めた」

Σ